



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	W. シュルツ 『生産の運動』と『資本論』:マルクス「機械論」形成史研究(8)
Author(s)	吉田, 文和
Citation	経済学研究, 34(1), 79-90
Issue Date	1984-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31644
Type	departmental bulletin paper
File Information	34(1)_P79-90.pdf



W. シュルツ『生産の運動』と『資本論』

——マルクス「機械論」形成史研究 (8)——

吉 田 文 和

はじめに

道具と機械の区別の基準を動力源に求める見解は古くからくりかえされており、マルクスも『資本論』第1巻第13章第1節「機械の発達」において言及・批判している。その例としてマルクスは W. シュルツ (Wilhelm Schulz, 1797-1860) の『生産の運動』¹⁾の所説をあげている。そこで注目すべきは、マルクスが批判の対象としてとりあげている本書について、「いろいろな点で称賛に値する一書²⁾」と注記している点である。一方で批判をしておきながら、他方で「称賛」するとは、いかにも理解に苦しむ事態である。しかしながら、「称賛」するからにはそれなりに理由があるにちがいない。

周知のごとく、マルクスは『経済学・哲学草稿』で、この W. シュルツ『生産の運動』から大部の抜粋を行なっている。そしてマルクスの「史的唯物論」形成に与えた『生産の運動』の影響については、A. コルニュ (Auguste Cornu) の問題提起以来³⁾、『生産の運動』の復刻版出版 (1974 年) を契機として、内外で本

格的な研究がつみ重ねられてきたところである⁴⁾。

ところで、最近刊行が完了したマルクス『1861—1863 年草稿』(新『メガ』版)によれば、同草稿中の『機械論草稿 (γ. 機械。自然諸力と科学の応用)』の末尾で、この W. シュルツ『生産の運動』がこれまた大量に要約・利用されているのみならず、シュルツからの直接抜粋ではない部分の記述についても、それがシュルツにもとづくものであることが判明した⁵⁾。したがっ

- 4) 廣松渉『マルクス主義の成立過程』至誠堂、1968 年、50-54 ページ。Gerhard Kade, *Wilhelm Schulz und die Herausbildung der politisch-ökonomie bei Marx, Eine Einleitung zu Wilhelm Schulz „Die Bewegung der Production“*. Verlag Detlev Auvermann KG, Glashütten im Taunus, 1974, S. I~S. XVI. 山中隆次「シュルツとマルクス」、『中央大学 90 周年記念論文集』1975 年、585-616 ページ。Walter Grab, *Ein Mann der Marx Ideen gab Wilhelm Schulz*, Droste Verlag Düsseldorf, 1979. 植村邦彦「W. シュルツの〈分業と生産諸力の歴史哲学〉とマルクス」、『一橋論叢』第 81 巻第 1 号、1979 年、60-76 ページ、以下植村論文①と略記する。同「W. シュルツの「自由時間」論」、『一橋研究』第 3 巻第 3 号 (41 号) 1978 年、67-81 ページ、以下植村論文②と略記する。同「W. シュルツ研究の新段階」、『一橋研究』第 5 巻第 3 号 (49 号) 1980 年、77-91 ページ、以下植村論文③と略記する。同「W. シュルツにおける歴史認識の方法」熊本大学『文学部論叢』第 9 号、1982 年、57-82 ページ、以下植村論文④と略記する。同「リストとシュルツ」、『社会思想史研究』第 7 号、1983 年、156-170 ページ。廣松渉・井上五郎『マルクスの思想圏』朝日出版社、1980 年、第 8 章。岡部義秀「分業廃棄論と自由な労働」(1)、(2)『関東学院大学大学院、経済学研究科紀要』第 9 号、1982 年、19-66 ページ、第 10 号、1983 年、31-81 ページ。

- 1) *Die Bewegung der Production. Eine geschichtlich-statistische Abhandlung zur Grundlegung einer neuen Wissenschaft des Staats und der Gesellschaft*, Verlag des Literarischen Comptoirs, Zürich und Winterthur, 1843. 以下 BP と略記する。
2) *Marx Engels Werke*, Bd. 23, Dietz Verlag, Berlin, 1962, S. 392. 邦訳、マルクス・エンゲルス全集版『資本論』第 1 巻、487 ページ。以下 MEW. Bd. 23, S. 392, 487 ページというように略記する。
3) *Karl Marx und Friedrich Engels. Leben und Werk*, Bd. 2, Aufbau-Verlag, Berlin, 1962, S. 122-S. 125.

て、W. シュルツ『生産の運動』は、初期マルクスに限られず『資本論』形成史、なかんずく「機械論」形成史においても正当に位置づけられ、評価されねばならないこととなる。研究史上確認されているように、『機械論草稿』末尾で抜粋・利用されている『生産の運動』の産業四段階論（手労働、手工業、マニュファクチュア、機械制）に関連した部分は、『経済学・哲学草稿』においては未だ検討されなかったところである⁹⁾。

そこで本稿は、W. シュルツ『生産の運動』の、マルクス「機械論」への批判・摂取に焦点をしぼり、シュルツの「道具・機械論」と、「産業の四段階」論をその源泉、形成過程にさかのぼって明らかにし、マルクス「機械論」の一源泉を提示したいとおもう。

I. 『生産の運動』にいたるまでの W. シュルツ

W. シュルツの生涯については、最近 W. グラープの研究によって、その政治活動家としての側面と、『生産の運動』の著者としての側面とを統一した人物像が明らかにされた⁷⁾。国内においても、これをふまえた植村邦彦氏の一連の研究が公表されている。したがってここでは『生産の運動』にいたるまでの W. シュルツの足跡について行論に必要なかぎりですら簡単にふれておきたい。

1797年3月13日、ダルムシュタットに生まれた、フリードリヒ・ヴィルヘルム・シュルツ (Friedrich Wilhelm Schulz) は、1811年大公軍に入り、幼年学校生徒として教育をうけた⁸⁾。解放戦争に参加した後、1815年ギーセン大学に入学し、ブルシェンシャフト運動に加わっ

て⁹⁾、普通選挙による人民代議制にもとづく統一ドイツ共和国という目標¹⁰⁾をかかげて運動した。1819年、匿名の『祖国ドイツの市民・農民のための緊急課題——問答集』がシュルツの筆になることがわかり、捕えられ¹¹⁾、1年間の取り調べの後、自由の身となり¹²⁾再びギーセン大学にもどり、1823年法学部を卒業した¹³⁾。

官吏になる希望をたたれて政治的時論家としての道を歩みはじめたシュルツは¹⁴⁾、1833年そのパンフレット『ドイツ人民の使者の遺言』のゆえに再び拘留され¹⁵⁾、5年の禁固刑をいわたされた。しかし1834年末、妻の協力で脱獄してチューリヒにむかい、スイスに帰化した。チューリヒ大学で教鞭をとることになったシュルツは、1836-37年の冬学期には、「一般・比較国家学」を講義している¹⁶⁾。

チューリヒ滞在中のシュルツは、ドイツの各種の雑誌、新聞に投稿をつづけた。そのなかにはケルンの『ライン新聞』も含まれていた。マルクスは、1842年10月から1843年3月まで、その編集長の任にあった。したがって『ライン新聞』をめぐる、シュルツとマルクスの最初の間接的な関係があったことになる¹⁷⁾。シュルツはまた1838年から『ドイツ季報』（シュトゥットガルト、コタ社）にも投稿をつづけた¹⁸⁾。なおロテック (Karl Wenzeslaus Rodecker von Rotteck, 1775-1840) とヴェルカー (Karl Theodor Welcker, 1790-1869) 編集の『国家辞典』に協力し、その「共産主義」の項目で、『聖家族』や『イギリスにおける労働者階級の状態』を紹介している¹⁹⁾。

9) Grab, *op. cit.*, S. 19.

10) Grab, *op. cit.*, S. 41-S. 43.

11) Grab, *op. cit.*, S. 48.

12) Grab, *op. cit.*, S. 51.

13) Grab, *op. cit.*, S. 53.

14) Kade, *op. cit.*, S. IV.

15) Kade, *op. cit.*, S. V.

16) Grab, *op. cit.*, S. 150.

17) Grab, *op. cit.*, S. 178. 廣松渉・井上五郎、前掲書、343ページ。

18) Grab, *op. cit.*, S. 179.

19) *Supplement zur ersten Auflage des Staatslexikons*, Bd. 2, Altona, 1846, S. 59, 71, 84.

5) *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*. II. 3, Apparat, Dietz Verlag, Berlin, 1982. S. 3089.

6) 植村論文① 73ページ。

7) グラープの業績については植村論文③を参照のこと。

8) Grab, *op. cit.*, S. 17.

II. W. シュルツ『生産の運動』の源泉

シュルツは、1825年から6年間、夕刊新聞『ヘスペラス (Hesperus)』(コタ社)のダルムシュタットの通信員であった²⁰⁾。この間、月曜新聞『モーンタークスブラット (Montagsblatt)』で明らかにしたいいくつかの命題は、シュルツの統計学的関心を示し、種々のヨーロッパ国家の人口と経済についての統計表を含んでいた²¹⁾。シュルツが政治的関心から統計学に興味を示すようになった理由はどこにあるのだろうか。1831年11月25日付の朝刊新聞『モルゲンブラット (Morgenblatt)』²²⁾に掲載された論文「統計学と政治学との今日的關係、ヘスペラスの目的と計画とくに関連して」にわれわれはその一端をみることができる。この論文は、「物質的な国民力と国家諸力をあらわすこと」を強調して、個々の国の人口の大きさ、増減、都市と農民の言語的・宗教的特質、生産・産業・商業の状態、「交通・交流手段」、「国富と国民所得」、「生産諸力と産業諸力と商業諸力の割合」、「物質的国民諸力に対する軍事力・金融力の割合」などを検討している²³⁾。このように、シュルツが政治的関心から統計学的検討を行なうようになった理由は、対立する諸階級の調和を信じて、様々な党派の極端な見解を、明白な真実の「公正な中庸」にむけようとしたからにほかならない²⁴⁾。

シュルツが統計学について独自の把握を示すにいたった論文「最近国民生活の精神および要求による文化の統計学」(『ドイツ季報』1838年第4号)²⁵⁾は、『生産の運動』(1843年)の原型をなしている。シュルツが「ゲッチンゲン学派統計学」の「国状論的統計学」から独自の統計

学についての性格把握を示し、さらに論文「労働有機体の変化と、社会状態に対するその影響」へいたる基礎概念を生み出す過程がこの論文である。シュルツは、シュレーツァー (August Ludwig von Schlözer, 1735-1809) の、「歴史は進行する統計学であり、統計学は静止する歴史である」²⁶⁾ という立場を発展させて、過去と現在の比較を通じて国家諸力の作用法則と運動法則を明らかにし、「社会的状態の発展における自然法則の把握」(SK. S. 269)を、統計学の目標とした。かくする社会発展の法則的把握という立場は、「国状論的統計学」の水準を大きく超えている²⁷⁾。

シュルツはさらに、この立場から、文化の一般史(世界史)に対比しての、文化の一般(普遍的)統計学の構想(SK. S. 271)を提示し²⁸⁾、そのうえでこの統計学によって哲学を基礎づけるという展望をも示している(SK. S. 273)。シュルツは、「文化の普遍的統計学」が「二重の視点」から、すなわち一方では、「全体的文化状態に広げられ」(SK. S. 284)、他方では「国家諸力の成分 (Bestand) が比較される」(SK. S. 284) ことによって、その論述体系が規定されるという。

第1の「全体的文化水準」への広がりとは、従来の統計学理論が、物質的国家諸力に限定されていることへの批判にもとづくものである(SK. S. 278)。シュルツは物質的文化からさらに道徳的文化へその視野を広げて、その道徳的(精神的)文化が、労働の組織の変化によって規定されていること(SK. S. 296)、「物質的状态は、知的文化へ、最大の影響をもっている」(SK. S. 296-S. 297) ことを洞察する。この立場が「史的唯物論」に著しく接近していることはいうまでもないであろう。

第二の、「国家諸力の成分比較」(SK. S. 284)

20) Grab, *op. cit.*, S. 54.

21) Grab, *op. cit.*, S. 60.

22) Beilage zu No. 310 des Morgenblatts 1831.

23) *Ibid.*, S. 5-S. 6.

24) *Ibid.*, S. 7.

25) „Die Statistik der Kultur im Geiste und nach den Forderung des neuesten Völkerlebens,“ In *Deutsche Vierteljahrs Schrift*. Heft 4. 1838. 以下 SK. S. ... と示す。

26) A. L. Schlözer, *Theorie der Statistik*, Erstes Heft, Einleitung, Göttingen, Vandenhoeck// Ruprechtischen Verlag, 1804, S. 86.

27) 植村論文④66 ページ。

28) 植村論文④70-71 ページ。

に関連し、シュルツはシャルル・デュパン²⁹⁾の理論に注目して大要こうのべている。

「C・デュパンは大ブリテンとフランスの物質的生産力を示そうとした。以前は、人はただ生産の結果、農業と工業の成果の統計を互いに比較しようとした。この諸力自体の割合をいっそう直接に考察しようとして、……人間力と生産に役立つ動物力、生命のない自然力の統一としてあらわした。そして、さまざまな種類の生産諸力の分配、労働の組織におけるもっとも重要な契機がより明瞭に把握されることが示された」(SK. S. 280-S. 281)。

シュルツはここでデュパンの著作名を明らかにしていないが、大ブリテンとフランスの生産力の比較という内容からみて、これはおそらく『フランスの生産力と商業力』³⁰⁾ (1827年)であ

ろう。シュルツは、デュパンが、①各国の生産物からすすんで、物質的生産力を比較した点に注目し、②さらに人間力と自然力(動物力と無生物力)の統一として、物質的生産力を考察したことも評価し、③最後に生産諸力の配分、労働の組織におけるもっとも重要な契機を明瞭に把握した点に留意したのである。

デュパンは、『フランスの生産力と商業力』で、農業においては、人間力と動物力の使用量を比較し(p. 23)、「工業力の調査」では「水力製粉機、風車、蒸気機関」(p. 29)などの自然力の利用に注目し、第2部第7章「作業場とマニファクチュアに利用される生産力の改良」では、数学や科学の応用を重視している。

シュルツは、これらをうけて、「生産諸力」と「労働の組織」(SK. S. 291)に注目することの重要性を強調し、これが「精神的文化と生活段階との程度の高低を表現」(SK. S. 291)するという。シュルツはデュパンに示唆をえて、人間力と自然力の関係を基準にして、「物質的文化」の三つの主要段階を区別する(SK. S. 291)。ここでシュルツは機械制を自然力利用と同一視しているが³¹⁾ (SK. S. 292)、この立場は道具と機械の区別の基準を自然力利用におくことにつながっている。『資本論』で言及・批判されるシュルツの道具・機械論の淵源はここにあるのである。

シュルツは「労働の組織」の段階として、「労働者自身が機械である人間の手」の利用から、「人間力と機械力」の利用へと、自然力(機械力)によって人間力がおきかえられていく過程をみて、「人間は自然諸力の精神的御者(Lenker)」(SK. S. 293)となるという。そして、これをもとに農業、工業、商業の各分岐の人口配分の比較を試みている(SK. S. 293-S. 299)。シュルツは

(1841). *Friedrich List Schriften, Reden, Briefe*, Bd. VI, Scientia Verlag, Aalen, 1971, S. 123. 546. リスト著、小林昇訳『経済学の国民的体系』岩波書店、1970年、140ページ。

31) 『生産の運動』(S. 39)では、水力・風力・蒸気力を「本来の機械的諸力」としている。

29) シャルル・デュパン (Dupin, Pierre Charles François Baron de, 1784-1873)。数学者、経済学者、教育家、政治家。1803年エコール・ポリテクニク(理工科学学校)卒業、海軍エンジニア。1801年モンジュの指導下でサイクロイドを発見。1807年コルプの港を再建、物体の抵抗と波の微分幾何を研究。イオニア・アカデミーのセクレタリー。1810年フランスにもどる。1813年『幾何学の展開』出版、ツーロンに海事博物館をつくる。1816年イギリスに留学。1819年コンセルヴァトアールの教授、数学・力学・産業についての講義と出版。1824年男爵になる。その後議員となる。以上は、*Dictionary of Scientific Biography*, Vol. 4. (1981), by Dirk J. Struik, p. 257.

30) *Forces productives et commerciales de la France*, Paris, Bachelier, 1827. 以下に目次を示したい。第I部 第1章国力を評価するために、今日まで用いられてきた手段の不十分さ、第2章人口調査、第3章有用な仕事に適用できる、人間力と動物力の評価、第4章工業力の調査、第II部 力の改良 第1章フランスにおける人間の物理的力がうけいれる余地のある改良、第2章生産と商業との諸関係において考察される人類の知力の改良、第3章われわれの田舎の住民を教育することによる人類の力の改良、第4章女性の能力と境遇の改良、第5章大きな動物の改良と増加、第6章農業に利用される改良の要約、第7章作業場とマニファクチュアに利用される生産力の改良(第III部略)。

ちなみに、本書はリストが『経済学の国民的体系』で引用している。Friedrich List, *Das Nationale System der Politischen Ökonomie*

ここから都市と農村の接近を論じ (SK. S. 284), 人口増大よりも高い程度で生産力が増大しているといい, 「相対的貧困」 (SK. S. 294) の問題を指摘している。そこで, 「より多面的な諸力のより大きな量が, 生産の共同的目的のために結合」 (SK. S. 295) されるように, 「経済的利害の再結合と調停」 (SK. S. 295) を行なうことが「社会政策のもっとも重要な課題」(同) になるとして, 社会主義の諸学説 (オーエン, サンシモン, フーリエ) の土台をみている。

シュルツは, 自然力の利用によって, 人間力が節約され, そのために「全体として, 精神的創造と享楽にとって, より多くの時間が得られ」 (SK. S. 296), 国民の「精神力の強度」(同上) が増大するという。古代ギリシャでは, 奴隷の利用という「人間と人間の間の分業」 (SK. S. 296) が政治的自由を保障していた。これに対して機械利用は「人間力と自然力の分業」によって, 自由時間をつくり出し, 「公共事への参加の能力を増大」(同上) させるという。こうして機械利用にもとづく自由時間の拡大による, 未来社会の展望を示しているのである。

なお, シュルツの方法論的基礎として, ヘーゲルの影響をこの論文において確認することができる。すなわち, 世界史が「生成 (Werden) の哲学」であるのに対して, 「文化の普遍的統計学」を「定在 (Dasein) の哲学」とし (SK. S. 271), ヘーゲルの『歴史哲学』にしたがって, 現在の「異なる国家群のうちに同時に異なる形成段階が明白に認められる」 (SK. S. 286) という立場をとり, 言語をも含めて手段を重視している (SK. S. 290)。また分業によって「機械的な, 精神の死んだ仕事」 (SK. S. 292) や「単調にくりかえされる活動」が機械力におきかえられるとする分業把握もスミス, ヘーゲルのものである³²⁾。

以上, 「文化の統計学」論文は, シュルツがヘーゲル哲学をその方法論的基礎として, 「国

状態論的統計学」に対して, とくにシュレーツァーの批判的摂取を通じて, 社会発展の法則的把握を主張し, さらに従来の統計学理論が物質的国家諸力に限定されていることへの批判にもとづいて, 「全体的文化状態」, 精神的文化をも視野におさめる「文化の普遍的統計学」を構想することによって「物質的文化」の「精神的文化」に対する規定性把握 (一種の史的唯物論) にいたるのである。

さらに, 物質的国家諸力に関して, シュルツはシャルル・デュパンの所説に注目して, 各国の生産物からすすんで物質的生产力の比較を評価し (生産物から手段へ), さらに人間力と自然力の統一として物質的生产を考察したことを分析し, そのうえで生産諸力の配分, 労働の組織におけるもっとも重要な契機を明瞭に把握した点を看取した。この立場からシュルツは, 自然力 (機械力) によって人間力がおきかえられる過程として「物質的文化」の三つの主要段階を区別する。そしてこれにもとづいて生産諸力の配分, 労働の組織の変化を論じて, 都市と農村の接近や自由時間の拡大, 政治への参加を展望するのである。

III. 『生産の運動』の分析

シュルツ『生産の運動』(1843年)は, 『ドイツ季報』(1840年第2号)の論文「労働有機体の変化と, 社会状態に対するその影響³³⁾」を基礎として, それに「序文」と第2部に当る「精神的生産」をつけ加えてなったものである。「序文」と新たに加えられた部分をみると, 当時の共産主義思想の台頭を意識した記述が追加されている³⁴⁾。

33) „Die Veränderungen im Organismus der Arbeit und ihr Einfluß auf die sozialen Zustände. Organismus der Arbeit zum Zweck der materiellen Produktion,“ In *Deutsche Vierteljahrs Schrift*, 1840, Heft. 2, S. 20-S. 98.

34) グラープによれば, これは1842年に出版された, ローレンツ・フォン・シュタイン『現代フランスの社会主義と共産主義』(L. Stein, *Socialismus und Communismus des heutigen Frankreichs. Ein Beitrag zur Zeitgeschichte*,

32) 拙稿「ヘーゲルの目的論とマルクスの労働過程論」北海道大学『経済学研究』第33巻第4号, 1983年, 37ページ。

すなわち、「プロレタリア大衆と上級階層とのあいだの溝は益々危機的に拡大される」(BP. S. 3) なかで、すでにブルードンによって財産に対する宣戦が布告されているが (BP. S. 4), これに対して「共産主義の妖怪」(BP. S. 6) を対置しても問題は解決しない。今日では、ドイツが「分別のある徹底的な吟味」(BP. S. 6) を行なうのに適しているが、最近のドイツ哲学、とくに「行為の哲学」(ヘス) (BP. S. 7) は、「教室のなかでの運動とつまらぬ知識に帰結」(BP. S. 7) している。しかし「現実のなかにのみ真理はある」(BP. S. 7)。所有権に対するブルードンの論駁は、「生産の変化と、その有機体の現今の編成との歴史的・統計的観察」(BP. S. 8) を行なうことを要請している。肝要なことは「生きている法則的な関連」(BP. S. 8), すなわち「生産の合法則的運動 (gesetzmäßigen Bewegung der Production)」(BP. S. 17) を示すことである。したがって、本書の表題もこれをうけて『生産の運動』(Die Bewegung der Production) となっているのである。

シュルツが運動法則というばあい、A. スミスの「労働の分割」(BP. S. 9) をさすが、さらにそれをもとにした「生産有機体」(同上) という概念をも包含している。シュルツは、この運動法則が「精神的側面と物質的側面」(BP. S. 10) において証明されねばならないという。「物質的生産」の分析をはじめににあたって、シュルツは人類史を総括して、彼のいう運動法則を示そうとする。シュルツは、人類の自然に対する「依存と自由の程度にしたがって」(BP. S. 11), 社会的諸形態の高低が説明されるとする。そのさい、彼はヘーゲル『法の哲学』の把握にしたがって、「一般に、欲求と手段の発展は手を取りあってすすむ」(BP. S. 11) という

視点に立つ。「文化の統計学」論文でうち立てた視点をひきついで、生産有機体(「労働の組織」とされてきたもの)は、二重の視点からすなわち、①「主部門における人口の比例的配分の変化」(BP. S. 17) という社会的分業の面からと、②「労働の運用 (Betrieb) における変化、すなわち生産的人間諸力と、生産に仕える知性をもたない自然諸力との関係における変化」(同上), つまり人間力と自然力の割合変化の面とから考察される。ここで留意すべきは両者の関係である。シュルツはイギリスを例にとって、「物質的文化の立場に対する尺度を、産業人口の大きさにのみ求めてはならない」(BP. S. 27) という。それは「産業運用の意のままになる外的手段が様々であるから」(同上) である。しかも第二の視点である「人間力と自然力」の割合も、利用される手段によってことになってくる (BP. S. 28)。したがって、この二つの視点は、人間によって利用される手段の発達によって規定され、それが両者の結節点となっているのである³⁵⁾。

シュルツはこの立場から、人類の四段階を区別する。まず、最初の手労働の段階において分業は未発展で (BP. S. 11), 肉体的活動と精神的活動は互いにもつれあっていた (BP. S. 13)。「手がほとんど唯一専有の人間の道具」(BP. S. 12) であり、人間は直接の方法で自分の必要物を自然からつかみとってくる (同上)。階級分化も公的権力もこの段階では問題にはならない (BP. S. 13)。

第二の段階においては、農業・工業・商業の分割が行なわれ、それがさらに分化してゆく。所有が発生し (BP. S. 15), 物質的生産と精神的生産の対立があらわれる (同上)。人間は、スキヤノコギリやノミをもって自然に立ち向かい (BP. S. 14), 「道具の概念を含む農業と手工業の分離 (Besonderung) に移行する」(同上)。

Leipzig, Otto Wigand, 1842. 抄訳は良知力編訳『資料ドイツ初期社会主義』平凡社, 1974年)に触発されたものであるという。Grab, *op. cit.*, S. 214. なお、大井正「ヘーゲル学派とローレンツ・シュタイン」明治大学『政経論叢』第50巻第5・6号, 1982年以下続稿参照。

35)『哲学の貧困』における、「労働は、それが使う用具の違いに応じて異なる様式で組織され、分割される」(MEW. Bd. 4, S. 149, 154ページ)というブルードン分業論への批判につらなる論点であろう。

手工業的活動は、分業にもとづいて「特定の道具」を扱うことに習熟し、身体を一面化させる(同上)。

ここでシュルツはさきの生産有機体の二つの視点から、これまでの二つの段階をふりかえり、まず人口配分の面から、農業・工業・商業の割合の比較を各国ごとに行ない(BP. S. 21-S. 25)、農民の一部がますます工業の様々な分野に従事している事実をもって、「粗野な共産主義」³⁶⁾(BP. S. 27)が暴力的に解決しようとした「都市と農村のすどい対立」が「自由で平和な進行」のうちに絶滅にいたると主張する(同上)。

つぎにシュルツは、第二の視点から、すなわち人間力と自然力の割合変化という面から農業における手段の利用に言及し、さらに土地所有の各国別比較におよぶ(BP. S. 28 ff)。そして農業における道具に関して、シュルツは「この点で、さまざまな時期と住民の比較をすると、大へん重要な段階が明らかになる」(BP. S. 35)とする。この面からイギリスにおける農具の改良を考察して、農業機械である蒸気スキの利用にも言及している(BP. S. 36)。さらに耕作の結果は、道具の数と性質のみならず、「利用の目的にかない、かつ適時の方法」(同上)に依存しているとのべ、イギリスにおける農法の改良と、収穫の増大を分析している(同上)。

また「発展の全く同じ経過は、本来の工業の領域において示される」(BP. S. 37)とのべ、工業における「四つの主な段階」(同上)を考察する。まずもっとも低い段階では、人間は自然が直接に供給するものをさがし出して、もっとも切迫した単純な欲求を満すだけである(同上)。第二の段階は、「より多面的な方法で、自然諸力を人間の目的に役立つように」(同上)利用することで、たとえば穀物をふみつぶすかわりに手挽臼を使用することである。第三の段階は、分業の利用である。シュルツはスミスの

事例を使って分業の利益をとく。これによって、「同じ1つの生産目的のために手から手へとわたる、最高度に分解された手工業的活動(handwerksmäßigen Tätigkeit)としてのマニユファクチュアの時代に入る」³⁷⁾。ここでシュルツはスミスにしたがって、分業とマニユファクチュアを結びつけた段階区分を行なっているのである。

第四段階は「機械による本来の工場生産」(BP. S. 37)である。シュルツは、分業によって、「機械的な、単純にくりかえされる仕事は、外的自然の知性のない諸力にあてがわれ」(BP. S. 38)るところに、機械制の特徴をみい出している。これによれば、分業→仕事の単純化→自然力によるおきかえ→機械、という論理であって、機械の利用は自然力の利用と同義になっている。そのよってきたところは、すでにみたごとく、シャルル・デュパンの生産力統計であって、本書においてもすぐあとで(BP. S. 38-S. 39)、デュパンの統計に言及している。かかる機械の把握のゆえに、人間労働は「自然諸力の制御者、管理者(Lenker und Leiter)」(BP. S. 38)となり、「生産物は、もはや彼自身の肉体的尽力とは比例しなくなる」(同上)といわれるのである³⁸⁾。

シュルツはこの観点から道具と機械の区別をつぎのようにのべる。

「スキ、ハンマー、ノミ、手挽臼、クサビ、ネジなどはいくら精巧であっても、人間が原

37) BP. S. 37. 『資本論』第1巻第12章「分業とマニユファクチュア」における「手工業的活動」という用語(MEW. Bd. 23, S. 386, 478ページ)は、シュルツに由来するという岡部論文①38ページの指摘がある。

38) 『経済学批判要綱』のつぎの記述を想起させる。「……現実的富の創造は、……それらの生産に要する直接的労働時間に比例しないで、……科学の生産への応用に依存する。……労働はもはや生産過程に内包されたものとしてはあらわれないで、むしろ人間が生産過程それ自体にたいし監視者(Wächter)ならびに規制者(Regulator)として関係する」(MEGA. II. 1. 2, S. 581, 邦訳『経済学批判要綱』III. 大月書店, 1961年, 653-4ページ)。

36) シュルツの「共産主義」論については、Grab, op. cit., 第6章参照。

動力であり、したがって、弓や矢も——これら全ては道具の概念に入る。他方、動物の力によって動かされるスキ、風力製粉機、水力製粉機、蒸気製粉機、火器は、機械に数えられる」(BP. S. 38)。

この部分は、さきの『資本論』の注88で、「……道具では人間が動力であるが、機械では動物や水や風などのような、人間力とは違った自然力が動力であるということに求める³⁹⁾」見解として引用・批判されている。シュルツが機械をそのように規定するにいたったのは、生産有機体の進行において、人間力が自然力によって代替されてゆく道すじをえがき、その行程において機械を位置づけていたためなのである。

シュルツはつぎに商業(交通)においても四段階がみられるとする。最初は「商品を手から手へ渡す交換」(BP. S. 38)である。第二段階は、駄馬、小舟などの「交通用具・手段」(同上)の利用である。第三段階は、大型ガレー船のように、分業によって、「人間が機械のように働く」(同上)。第四段階は、帆船、汽船、蒸気車などの自然力が人間力にとってかわり、何倍もの力を発揮する(同上)。「そういうわけで、商業にも、農業や工業と同じように、手労働、手工業、マニュファクチュア、そして機械制という画期があるのである」(BP. S. 38-S. 39)と総括される。

シュルツは以上の農業・工業・商業の四段階をふまえて、「労働有機体の変化を総括」(BP. S. 40)する。第一段階(手労働)では人間力は圧倒的に原始生産に向けられている。第二段階(手工業)では、原料の単純な利用と、商工業の分離・発展がある。第三段階(マニュファクチュア)では、道具と手工業が多様化されて、もっとも単純な要素に労働が分解される。第四段階(機械制)では、生産諸力のより広範囲な再結合が行なわれる。この結合は、生産諸部門の結合から、株式会社における再結合にまですすむという。シュルツによれば、こうした再結

合によって、「農業と工業と商業との利害のきびしい諸対立が緩和され融和される」(BP. S. 41)。

また注目すべきは、「機械制は、本格的マニュファクチュアを完全に排除することなく成功し、マニュファクチュアは、手工業を排除することはできなかった」(同上)とのべて、四段階がそれぞれ同時代に重層的に展開することを示している。このあと、各国の農業生産力を、人口との比較で分析している(BP. S. 41-S. 45)。そしてシュルツは工業生産や交通手段の発展を分析し(BP. S. 46-S. 50)、さらに法律制度(BP. S. 51-S. 52)や関税制度(BP. S. 55-S. 56)にふれ、自由競争によって、「物的および人格的な財産〔能力・Vermögen〕の連合が解体された」(BP. S. 57-S. 58)とのべている。これに対して共産主義は「1つの死んだ一般的財産共有体に止揚」(BP. S. 58)しようとしているが、シュルツは私的所有を攻撃することのない生産共同体を対置する(BP. S. 58)⁴⁰⁾。

このあと、シュルツは移民政策や貯蓄組合制度を批判して⁴¹⁾、資本主義の生み出す機械労働の弊害(BP. S. 62)や過剰生産恐慌(BP. S. 63)、労働者状態の貧困(BP. S. 65)、自由時間の拡大(BP. S. 67)を分析し⁴²⁾、機械制生産による自然力利用によって生産力を向上させて、自由時間の拡大にもとづく「自由と平等の理念」(BP. S. 74)の実現を展望して、第1部「物質的生産」を終えている。「物質的生産」の後半部分は、『経済学・哲学草稿』で抜粋され、先行業績によって詳細に紹介・検討されているところでもあり、本稿ではこれ以上の詳論はひかえることとしたい。

IV. シュルツの道具・機械論と四段階論

さきにみたように、シュルツの道具・機械論

40) Grab, *op. cit.*, S. 219-S. 220.

41) BP. S. 59-S. 60. これはヘーゲル『法の哲学』を念頭においてのこととおもわれる。山中論文, 607ページ。

42) 植村論文②参照。

と四段階論は、ヘーゲルの歴史哲学と手段論を方法的導きとして、分業に関しては、スミスの分業論をひきつぎ、人間諸力と自然諸力の割合変化という面については、シャルル・デュパンなどの生産力統計を基礎としている。農業・工業・商業の三部門に共通して、手労働、手工業、マニファクチュア、機械制の四段階がみられるというシュルツの議論は、分業論からみれば、それぞれ未発展→導入→展開→再結合という段階区分であるが、その画期はマニファクチュアである。そして分業とマニファクチュアを結びつけた点ではやはりスミスにもとづいている。また、人間諸力と自然諸力の割合変化からみれば、それぞれ漸次的に自然諸力の割合は拡大していくが、その画期は機械制である。なぜなら、シュルツによれば人間力にかえて自然力を利用するものが機械だからである。労働手段の発展の面からみれば、手→道具→道具の改良→機械であり、これが分業と自然利用の両面を結び、規定する結節点となるという構造をとっている。

V. 『機械論草稿』における『生産の運動』の利用

『1861-1863年草稿』の『機械論草稿』末尾における『生産の運動』の抜粋・要約利用は、ノート XX-1280, 1281, 1282 の部分である。以下、少し長くなるが引用しておく。

- ① 穀粒の損失は、打穀機ではふつうの手打ちの場合よりも $2\frac{1}{2}$ パーセントは少ないと見積られている。機械は、原料をより精巧に加工する等々の結果、同じだけの原料から、手労働の不完全な道具をもってする場合よりもより多くの分量の製品をうみだすということは、ほとんどすべての機械についていえる。(廃物の利用、ぼろ等々の原料への再転化)⁴³⁾。
- ② 改良農法。「それは(イングランドでは)ジョージ二世の治世下で、休閒地へのクローバー栽培の導入

と大規模なかぶ栽培の導入をもってはじまった。以来、砂地や役立たずの圃地がりっぱな小麦畑や大麦畑に姿を変え、砂地での穀物生産は3倍に増えると同時に、他方では牛や羊用のすぐれた緑餌が得られた。交配による畜産の増加と品種の改良、灌漑と排水方法の改良、合理的な輪作、肥料としての骨粉の利用、等々⁴⁴⁾。

- ③ マルサスは、収穫高を、ヨーロッパ的な国家体制の国々については平均して播種量の4倍、ハンガリーとその隣接諸国については8倍と10倍、アメリカの熱帯地方は12から20倍にもなる、とみている⁴⁵⁾。

〔別表〕⁴⁶⁾

	耕地面積 100万ha	労働者数 100万人	穀物生産 100万ℓ	馬 100万頭	牛 100万頭	羊 100万頭
大ブリテン	13	5.2	56	0.17	1.25	10.2
フランス	40	22-24	153	0.04	0.8	5.2

- ④ 「自由競争の制度、この無秩序の秩序は、それ自体としては否定的な意義しかもたない。それは、比較的大規模な錯綜した土地制度や領主と農民のあいだのかたい結びつきにおいてあらわれていたような、同じくまた親方、職人、徒弟という厳格に格付けされた諸関係をともなった同職組合的協同においてあらわれていたような、かつての物的および人格的な財産の連合が解体されたことをあらわしている」(W. シュルツ『生産の運動』、チューリヒ、1843年、57-58ページ)⁴⁷⁾。
- ⑤ 「労賃は増えている、あるいは、必要生活諸手段の関係でいえば、いずれにせよ減ってはいない、という統計的に立証される主張はすべて、せいぜいのところがたんなる抽象的な真実とでもいうべきものであって、それは現実にあてはめれば、むなししい錯覚であることが明らかになる。ただ次のことだけは主張できる。特別の才能があるいは比較的長期の準備教育を前提とするような仕事はだいたいにおいてよりもうかるものになったが、だれでも容易かつ速やかにおぼえることのできる機械的で単調なはたらき

43) BP. S. 36 の要約。MEGA. II. 3. 6, S. 2087, Apparatus, S. 3089, 邦訳、中峯照悦他『1861-1863年草稿抄』大月書店、1980年、307ページ。以下、BP. S. 36, MEGA. S. 2087, Apparatus, S. 3089, 訳307ページというように略記する。

44) BP. S. 36, MEGA. S. 2087, Apparatus, S. 3089, 訳307-308ページ。

45) BP. S. 42, MEGA. S. 2087, Apparatus, S. 3089, 訳308ページ。

46) BP. S. 43, MEGA. S. 2087, Apparatus, S. 3089, 訳308ページ。

47) MEGA. S. 2087-S. 2088, 訳308ページ。

のほうは、競争が激しくなってその相対的な賃銀は下がったし、また必然的に下がるざるをえなかった、ということである。そして、まさにこの種の労働こそが、現状の労働編成のもとではまだまだ最多数を占めているのである。したがって、第1の部類の1労働者が、現在、たとえば50年前の7倍をかきせぎ、第2の部類の別の労働者は50年前と同じしかかせいでいないとしても、両者を平均すれば確かに以前の4倍をかきせているということになる。しかるに、もしある国で、労働者の第1の部類がわずかに1,000人、第2の部類が100万人で占められるとすれば、99万9,000人の暮らしは、50年前とくらべては良くはなっていないし、もし、生活必需品の価格が同時に上がっていれば、より悪くなっている、ということになるのだ」(シュルツ、同書、65ページ)⁴⁸⁾。

- ⑥「しかし、社会の全階級の平均収入は増えているという主張は、嘘であるが、たとえそれがほんとうであるとしても、やはり収入の差およびその相対的な距りはいっそう大きくなっているかもしれないし、それによって、富と貧困の対立がいっそう鋭くあらわれているかもしれないのである。というのも、まさに総生産の増大が原因で、そしてそれに比例して、必要、欲望、要求もまた増大するからであり、したがって、絶対的貧困は減少しても相対的貧困のほうは増大しているかもしれないからである。サモエド人は、鯨油とすえた油で生活していても、貧しくはない。なぜなら、彼らの閉鎖的な社会ではすべての者が同等な欲求をもっているのだからである。しかし、たとえば10年間にその総生産を人口との対比で3分の1だけ高めた前進しつつある国家にあっては、10年前も後も同じかきせぎでしかない労働者は、以前と同じ豊かさで暮らしているのではなくて、3分の1だけより貧しくなっているのである。われわれの時代に起きているのは、まさにこの種の事例なのである」(65-66ページ)⁴⁹⁾。
- ⑦「一民族は、精神的にいっそう自由に発展するためには、もはや自分の肉体的必要の奴隷にとどまっていたはならない。つまりもはや肉体の奴隷であってはならない。それゆえ、その民族には、なによりも精神的に仕事をするのできる、そしてまた精神的に享受することのできる時間のゆとりがなければなら

ない。労働の有機体における進歩がその時間をかせぎ出すのである。……かつてある分量の物質的必要を充足するのに必要だった時間と人間の力の費消が、その後半分に減ったとすれば、物質的な満足をなんらそこなうことなしに、ちょうどその分だけ、精神的な創造と享受のための余地を同時に拡げることができるのである。……とはいえ、われわれが古えの〔時の神〕クロノスから、この神が所管する領地の最奥の場所でかすめ取った当の獲得の分配においてもまた、いまなお盲目で不公平な偶然のサイの目が決定しているのである。……少なくとも、多数の住民の工場における奴隷労働の持続時間が、機械制の完成による時間節約にもかかわらずただひたすらに拡大している、というのは確かなことである。とはいってもやはり、より多くの自由な時間の獲得は、共有される民力〔Nationalkraft〕の獲得なのである」(67-68ページ)⁵⁰⁾。

- ⑧「マニユファクチュアの時代……最高度に分解されていると同時に、同じ1つの生産目的のために手から手へとわたる手工業的活動の時代」(37ページ)⁵¹⁾。
- ⑨「労働のたえまない分割が、ついにはよりいっそう完成した機械制の応用へと、それとともに第4の段階に」{第1に手労働、それから手工業的労働、そしてマニユファクチュア、そして次が工場生産}、「機械による本来の工場生産へとみちびくのである」(37ページ)⁵²⁾。
- ⑩「工場生産において、「人間は、……賢明な、肉体的にというよりもむしろ精神的に活動する、自然諸力の制御者、管理者となる。つまり、人間は、そのことによってまったく別の活動関係にはいるのである。というのは、人間は、生産の諸目的に従うべき諸素材をいよいよもって人間のものでない自然諸力と結びつけるからである。したがってまた、それらの力の活動の結果つまり生産物は、もはや彼自身の肉体的尽力には比例しなくなるからである」(38ページ)。{すでにマニユファクチュアや単純な協業においても、生産物は、人間の個人的な作業能力には比例しない}⁵³⁾。
- ⑪「運輸という方法によって商品価値を高めることを

50) MEGA. S. 2088-S. 2089, 訳 310 ページ。

51) MEGA. S. 2089, 訳 310 ページ。

52) MEGA. S. 2089, 訳 310-311 ページ。

53) MEGA. S. 2089, 訳 311 ページ。

48) MEGA. S. 2088, 訳 308-309 ページ。

49) MEGA. S. 2088, 訳 309-310 ページ。

目的としている商業は、産業の一分岐にすぎず、本質的には産業と同じ発展法則に従うのである。最初の、最も単純な種類の商業は、商品を手から手へ渡す交換である。それにつづいて、商業は、さしあたりはまだ単純な交通用具・手段を、たとえば、運搬用の駄馬、あるいは小舟——それを操り動かすのはやはり人間に手道具として仕えるかじ・かいである——といったものを手にいれる。ひきつづき交通という共通の目的にもろもろの活動が配分されるのが認められる。たとえば大型ガレー船——そこでは、なおたくさんの人間が、単調にくり返される、しかし同時にたがいに連繋した作業において、機械のようにはたっている——におびたしい人員が配置される、などのように。最後に、帆船、汽船、蒸気車、等々のかたちで、風力や蒸気力が人力にとってかわるだけでなく、人間の意志に従って人力の何倍もの力を発揮することによって、より高度の発達段階が歩みを開始する。……そういうわけで、商業にも、農業や工業と同じように、手労働、手工業、マニュファクチュア、そして機械制という画期があるのである」(38-39 ページ⁵⁴⁾)。

引用①, ②, ③と別表は、『生産の運動』当該部分からの要約であり、農業における生産の進歩を各国別に比較したものである。

引用④, ⑤, ⑥, ⑦は、それぞれ『経済学・哲学草稿』においても抜粋され、「自由競争による連合の解体」、「労働者の相対的貧困」、「自由時間の拡大」などの内容をもっており、これまでも研究史において検討されてきたところである。

引用⑧, ⑨, ⑩, ⑪は、どれも四段階論に関連した部分である。この産業の四段階論が『機械論草稿』末尾で抜粋・検討されている意味は軽視されてはならないとおもわれる。『1861-1863 年草稿』においては、「相対的剰余価値」の内容構成は、a「協業」、b「分業」、c「機械。自然諸力と科学の応用」である。これに対して、『資本論』は第11章「協業」、第12章「分業とマニュファクチュア」、第13章「機械と大工業」となっている。

54) MEGA. S. 2089-S. 2090, 訳 311-312 ページ。

両者を比較してとりわけ注目されるのは、b「分業」が第12章「分業とマニュファクチュア」へ、c「機械。自然諸力と科学の応用」が第13章「機械と大工業」へと改変されている点である。『機械論草稿』は内容上、のちにマニュファクチュア論となる素材を大量に含んでいる。したがって、『1861-1863 年草稿』では、分業の学説史的検討が中心を占める分業論にマニュファクチュア論をくみ入れ、かつ機械論を大工業論として整備するという改変である⁵⁵⁾。問題は、この構想を、なぜ、いついかにいたったかである。私はこの問題をとく1つの鍵が『機械論草稿』末尾における W・シュルツ『生産の運動』の四段階論の検討にあるようにおもわれる。なぜなら、さきにみたように、マルクスはそこで、農業にも工業にも商業にも、手労働、手工業、マニュファクチュア、機械制という画期があるという部分を集中的に抜粋しているからである。すなわちシュルツは、分業とマニュファクチュアを結びつけ、そのマニュファクチュアの機械制への移行を説いていたのである⁵⁶⁾。「分業とマニュファクチュア」、「機械と大工業」という整理・総括はまさにこれによって導かれるのである。

む す び

シュルツの道具・機械論と四段階論は、ヘーゲルを方法的基礎として、スミスの分業論とデューパンなどの生産力統計をその源泉にもっていた。シュルツは、これをもとに「生産の運動」法則を明らかにし、機械による自然力利用によって生産力を向上させて、自由時間の拡大にもとづく「自由と平等の理念」の実現を展望し、

55) シュルツ『生産の運動』(BP. S. 5) に「大工業」(die große Industrie) という用語がみられる。

56) マルクス『1861-1863 年草稿』の「b. 分業」においても、すでにマニュファクチュアと分業とを結びつける把握を示している (MEGA. II. 3. 1, S. 270, 訳 476 ページ)。この点につき、植村邦彦氏の御教示をいただいた。しかし、マニュファクチュアから機械制への移行を説くというところまでにはいっていないとおもわれる。

当時の「共産主義」の理念に対置したのである。

マルクス主義の三つの源泉といわれる「ドイツ古典哲学」、「イギリスの古典経済学」、「フランスの社会主義・共産主義」のうち、シュルツは「フランスの社会主義・共産主義」を対抗上念頭において、「ドイツ古典哲学」（ヘーゲル）を方法上の武器として、「イギリスの古典経済学」のうえにさらに統計学（ドイツの「国状論的統計学」とフランスの生産力統計）をその基礎として、過去を総括し（歴史）、現状を分析し（統計）、未来を展望した（政策）のである⁵⁷⁾。

このようなものであったからこそ、初期マル

クスの「史的唯物論」の形成に対して、一定の影響を与えることができたのである。そればかりではない。『資本論』、とりわけ「分業とマニファクチュア」論、「機械と大工業」論の形成に対しても、シュルツの四段階論は影響を与えた。すなわち、分業とマニファクチュアを結びつけ、そこから機械制への移行をとくシュルツの論理は、『1861-1863年草稿』における、b「分業」、c「機械。自然諸力と科学の適用」が、『資本論』で、第12章「分業とマニファクチュア」、第13章「機械と大工業」へと編成がえを行なわれるさいの一契機となったと考えられるのである。

57) 山中論文, 592 ページ。植村論文④60, 72 ページ。